

経営の こころ

日さく社長

若林 直樹 氏

創業115年の歴史を持つ日さく(さいたま市大宮区)。機械による井戸工事を祖業とし地

人を大切に、取り残さない

73

質調査、特殊土木工事のプロフェッショナルとして国内外で多くの実績を持つ。地震や火山の観測、温泉、地熱など多様な目的の井戸を手がけ、地下水をくみ上げる水源井の実績だけでも国内で3000本に迫る。

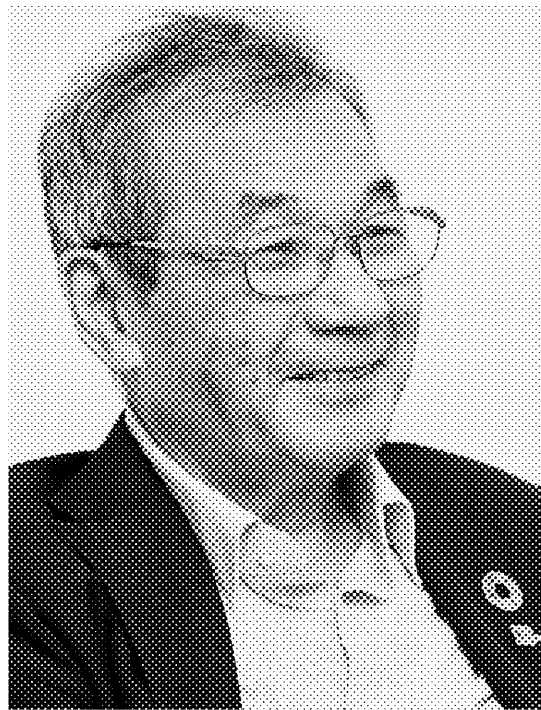
若林直樹社長は技術屋で「経営については誰も教えてくれなかった」と振り返る。2003年に大阪支店長として組織をまとめる立場になったことを契機に、本を読んだり他の企業の人から話を聞いたり自ら必要な経営知識を学んだ。現場の状況を常に把握することの重要性は

支店長の経験から得た。関西支社長、西日本支社長、取締役と歩むにつれ考え方が変化する。支店や支社は、20人、30人の人たちが仲間意識を持ち、利益を出すことがどうしても先立った。だが、利益を生むのは人であり、どんな人も活躍の場が必ずあるという思いが常にあったという。社長になつてからは「人を大切に、誰一人取り残さない」ことを経営の要に位置付ける。実際に個々の資質や能力を最大限に発揮できる職場環境作りに注力し、女性活躍や人材育成、多様性につながる



わかばやし・なおき 77年(昭52)早大院理工学研究科(資源工学)修士修了、同年日さく入社。16年から現職。斜面防災対策技術協会会長、全国さく井協会副会長、早大商議員。東京都出身、74歳。

個々の力引き出す職場づくり



制度を整えている。その一つ、海外の若手人材を国内に受け入れ、いつか母国で事業ができる人材に育てる取り組みは、「企業や自分の利益だけで考える時代ではない。グローバル規模で地域貢献すれば、それが新たなビジネスにつながる」という信念が、人を大切にする考えと結びついた。無私を重んじ、大局を見る若林社長の性格の表れだ。

若林社長は経営者に必要な資質として「知恵」「人間力」「俯瞰力」を挙げる。知恵は知識を生かす能力で、書物で学んだ知識は実際の経営に当てはめることができない。現場を認識し、知識を基に思考して課題を解決する姿勢が重要と解く。

人間力は、特に謙虚さと自ら実践する力が大事だという。「あいさつや会社周辺の清掃、人に敬意を持つコミュニケーションを取る」ことが企業環境を整え、社員のレベルアップに



日さく本社の防災井戸と若林社長

つながる」とし、自ら率先して取り組んできた。ただ「社長がいるとやりづらいい」と言われ地域清掃は控えていると苦笑する。

俯瞰力は広い視野で物事を考察する力で「地域や社会への貢献、多様な業務の経験などが培う」と説く。1970年代から始まった海外事業が俯瞰力の必要性を持たせた。

次の課題は後継者育成だ。「『社長としての自分を超えられるか』を基準に後継を考えないと企業は成長しない」としつつも「社長就任から10年たった。あまり長く続けると組織は頭(社長)から腐る」と時間をかけるつもりはない。

次代の経営者はさらに不透明な環境でかじ取りを担う。「不透明だから経営はやりがいがある。『これからがこれまでを決める』と考え、学びを怠らず謙虚に話を聞き、成長の糸口を見つけてほしい」とエールを送る。

(さいたま総局長・石橋弘彰)